

かっぱ 河童の恩返し

昔、兜石^{かぶといし}の石山にある飛観音^{とびかんのん}の少し下流に、底が測り知れない深い淵がありました。

ある晴れた日の暮れ方、縄沢村の喜四郎という者が、野良仕事の帰りに、淵の川岸に飼葉桶^{かいばおけ}を置いて馬に水を飲ませ、少し離れた所で秣^{まぐさ}を刈って戻ってみると、飼葉桶がひっくり返っていました。変だなと思い、元に戻そうとしましたが動きません。困った喜四郎が仲間を呼んで力任せに引っ張ると、なんと中に赤ん坊のような不思議な生き物がへばり付いていました。喜四郎たちは「なんだこれは！魔物だア打ち殺せュ！」と叫んで殺そうとしました。するとこの生き物は、逃げ回りながら「私はこの淵にすむ河童です。決して悪いことはいたしません。ただこの飼葉桶が欲しかっただけです。殺さないでください。命を助けてくだされば、村の水難をなくします。私の力できっとやります」と言うので、村人たちは哀れに思い、河童を淵に帰してやりました。それからというもの、村が水害に見舞われることはなくなったといわれています。

また、ある年は村が凶作で食べ物がなく、餓死する者さえいる始末でみんな困っていました。すると明るる年、山菜採りに行った村人が帰りに通りかかった神社の池で、たくさんの稲束が沈んでいるのを見つけました。稲^{もみ}不足で困っていた村人たちは、その稲束の籾^まを持ち帰り苗代に蒔きました。秋になるとそれが黄金波打つ大豊作となり、村人たちは大喜びで「きっと河童が籾^{こがね}を恵んでくれたに違いない」と河童に感謝しました。その池は「種籾池」と呼ばれ、今も御稷神社の境内の隅に小さく残っています。

参考文献＝『新編会津風土記』（丹藤明「西会津ふるさとの伝説」）



かつて河童がいたといわれる淵附近



今は小さな種籾池

今月の表紙

今月の表紙は5月14日に行われた寺前自然塾主催の「菜の花まつり」から。写真の女性は「にしあいづ観光クルー」の齋藤貴子さん(右)と榎本梨奈さん(左)。中央の男性は二本松市出身のトランプペット奏者・Noby(ノビー)さん。
※11ページに関連記事

お詫びと訂正

5月号12ページの「こちら西会津交番」で紹介した田部悠大さんのふりがなを「ゆうだい」と記載しましたが、正しくは「ゆうた」です。また、15ページの「町民ギャラリー」で紹介した「尾崎サト子さん」は、正しくは「尾崎サトさん」です。お詫びして訂正します。

編集後記

暖かく活動しやすい季節になりました。町内では毎週のように行事やイベントが開催され、日々取材に追われています。この季節は毎日がお出掛け日和ですね。 長谷川祐一